

# テ形と共起するとりたて詞について

田川 拓海

## 0. はじめに

本稿では、とりたて詞（沼田(1986, 2000)）が、テ形と共起した場合の振る舞いについて、主に統語論的な観点からの記述を提出する。これは、とりたて詞およびテ形の統語論的研究に関する予備的考察でもある。具体的には次の二つの議論を行う。

- (1) a. とりたて詞が動詞連用形とテ形それぞれに後接する可能性によっていくつかのタイプに分けられることを示し、特にダケ、バカリを取り上げ、その特徴を記述する。  
b. 「デ+X」という形式をとるとりたて詞の存在を示し、その特徴を観察する。特に、このデがどのように位置づけられるべきか、という点に関していくつかの議論を示す。

## 1. 問題: とりたて詞とテ形の関連

まず、次のような対比を見てみる。

- (2) a. 太郎はデザートを食べさえしている。  
b. 太郎はデザートを食べてさえいる。

(2a)の例では動詞語幹連用形とテの間にとりたて詞「さえ」が生起しており、(2b)の例ではテの後にとりたて詞が生起している。

この例は、日本語の特徴の一つでもある述語複合体内部へのとりたて詞の生起を、統語構造の一般的な階層上に位置づけると考える立場にとっては非

常に問題である。なぜなら、テの直前と直後という非常に近い位置に同じとりたて詞の生起できる位置（スロットのようなもの）が二つ独立して存在するというのは余剰的であるし、通言語学的に見てもそのような現象は管見の限り見当たらない。

一方、とりたて詞を何らかの統語論的構成物に付加する (adjoin) 要素であると考える立場 (Aoyagi(1998)など) では(2a, b)の対比はそれほど問題にはならない。

しかし、確かにとりたて詞は名詞だけではなく非常に多様な要素に後接することができるが、動詞の連用形に関して言うと、事情が異なってくる。なぜなら、この環境に生起できないとりたて詞がいくつか存在するからである。

- (3) a. \*太郎はデザートを食べばかりした。  
b. \*太郎はデザートを食べだけした。

(2a, b)のような例を、「とりたて詞が自由にどのような要素にも付加しうる」ということによって説明するのであれば、今度は(3a, b)のような例が非常に問題になってくる。

これは、とりたて詞の統語論的性質および階層構造上の位置を考える上で非常に重要な問題であるが、特に(2a, b)の対比はこれまで正面から問題として取り上げられることが無かった。本稿では特に(2b)のようなテにとりたて詞が後接する例に焦点を当てて論じる。

また、テ形に関連して、次のような現象も問題として取り上げる。

- (4) a. 太郎でもこの問題を解いた。  
b. 太郎ですらこの問題を解いた。

このような「X+デ」型のとりにたて詞については、これまで先行研究においてほとんど取り上げられてこなかったが、このデ、および「X+デ」全体の性質もとりにたて詞の統語論的研究に対して一つの興味深い問題を提起する。

本稿ではとりたて詞の統語論的な位置付けという大きな問題に回答を与えることはできないが、上で示した二つの論点に関する観察・記述を整理し、

その土台とすることを目的とする。また、その議論はテ形の統語論的位置付けに関しても新たな視点をもたらすものである。

## 2. テの性質ととりたて詞の種類

本節以降、いくつかのとりたて詞をグループ化して取り扱うが、例えば沼田(1986, 2000)で定義されたとりたて詞を網羅するものではない。典型的であると考えられるいくつかの語を取り扱う。

### 2.1. ハ、モ、サエ、スラ、(シカ)

ハ、モ、サエ、スラ、シカのとりたて詞は、次に見るように、比較的安定してテの前後に生起することができる。

#### (5) テの前

- a. 太郎はデザートを食べ は/も/さえ/すら している。  
b. ?太郎はデザートを食べしかしていない。

#### (6) テの後

- a. 太郎はデザートを食べ は/も/さえ/すら いる。  
b. 太郎はデザートを食べ しかいない。

筆者にとっては、(5b)は許容度が落ちるが、完全に許容できる話者も多いようである。一方、(6b)は筆者にとっても完全に許容できる文である。

### 2.2. ダケ、バカリ

ダケ、バカリといった語群はテの前に現れることができない。

#### (7) テの前

- \*太郎はデザートを食べ だけ/ばかり している。

一方で、この二つの語はテの後に現れるかどうかで違いを見せる。

#### (8) テの後

机の上で考えて ばかり/??だけ いても、はじまらない。

「だけ」はその意味に合うように文脈を整えても、やはり許容度はかなり悪いと感じられる ((8))。金水(1999)がテアルのテに関して論じたように、テイルのテは付加節(従属節)のテとは違い、イルの補部(complement)であると考えられるので、(8)の対比はダケ、バカリが統語階層上、どの位置に生起することができるかという点に直接関係している可能性がある。

また、(8)に関しては、次のような対比も興味深い。

#### (9) a. 太郎はいつも机の上で考えてばかりだ。

b. \*太郎はいつも机の上で考えてだけだ。

(9a)が「太郎はいつも机の上で考えてばかりいる」とほぼ同じような意味を表すことができるのに対して、同じく限定の意味を持つ「だけ」はそのような意味を表すことができない。しかし、この「テイル」との言い換えができるのは「反復」の意味を持っているような場合のみであり(茂木(2002))、次のような典型的な結果相(resultative)の場合はバカリダを使って言い表すことはできない。

#### (10) a. その花瓶はさっきから壊れている。

b. その花瓶はさっきから壊れてばかりだ。

(10b)は「いつも壊れる」というような解釈しかできず、(10a)と同じ状況を表すことはできない。

すなわち、(8)でバカリの例がテイルと言い換えられるのは、「机の上で考える」という出来事をテで一まとまりとし、バカリの意味によって時間軸上に位置付けるという文全体の意味の構成が、テイルの習慣の意味とほぼ同じになってしまうためであると考えられる。

### 3. ダケとバカリの統語論的相違点

本節では、2.で取り扱った二つのグループのうち、ダケとバカリについてさらに詳しく考察する。

前節ではテイルのテへの後接に関して見たが、ここではさらに他の意味を持ったテ節に対する後接の可能性について考える。

#### (11) 付帯状況

- a. 太郎はうなずいてばかりで、何も言おうとしない。
- b. \*太郎はうなずいてだけで、何も言おうとしない。

内丸(2006)が示唆しているように、付帯状況のテがアスペクトのテであると考えれば、(11a, b)の対比はテイルの場合 ((8)) と同じところに起因していると考えられることができる。

次に対比的なのが手段（原因・理由）のテの場合である。

#### (12) 手段（原因・理由）

- a. \*太郎はバスを使ってばかり、学校に行っている。  
(cf. 太郎は学校に行くのにバスを使ってばかりいる。)
- b. 太郎はバスを使ってだけ、学校に行っている。

(12b)もやや不自然な感じはあるが、(12a)ほど許容度が落ちるわけではない。また、(12b)は次のように可能の文脈に置けばさらに許容度が上がる<sup>1</sup>。

#### (13) その学校にはバスを使ってだけ行ける。

<sup>1</sup> また、興味深いことに(11a)のバカリにはデが付いても付かなくてもそれほど許容度が変わらないのに対して、(13)のようなダケにデを付けると許容度が落ちる。

- a. ?太郎はうなずいてばかり、何も言おうとしない。
- b. \*その学校にはバスを使ってだけで行ける。

この現象はダケとバカリの語彙特性に起因する個別的問題なのかもしれないが、同じくデに関する議論なので、別の機会に検討することにした。

南(1974)で示されたように、付帯状況のテは比較的文の内側（階層構造上では“下”）、手段（原因・理由）のテは外側（階層構造上では“上”）に位置するとすれば<sup>2</sup>、やはりここで観察したような現象もダケとバカリの統語論的な分布に関連していると考えられる。

また、内丸(2006)で示されたような、付帯状況のテとそれ以外のテでは主節との統語論的關係そのものも異なっているという観点からも考察が必要かもしれない。

興味深いのは、ダケとバカリというのは意味論的におおまかにくくれば「限定」という意味を表しているにも関わらず、ここまではっきりとした体系的な相違を見せる、という点である。これは沼田(1986, 2000)で「とりたて詞」が第一には統語論的基準によって定義されたのと同様、とりたて詞に関する純粋な統語論的アプローチの必要性を示唆している。

### 4. 「デ+X」の形をとるとりたて詞について

「デモ」が一語であるのか、「デ+モ」であるのかという点についてはいくつか議論があるものの、デにとりたて詞が後接する現象について詳しく考察した論考は管見の限り非常に少ない。しかし、いくつかのとりたて詞はこの形式を取り、興味深い振る舞いを見せる<sup>3</sup>。

- (14) a. 太郎でもこの問題を解いた。
- b. 太郎ですらこの問題を解いた。
- c. 太郎でさえこの問題を解いた。
- d. \*太郎ではこの問題を解いた。
- e. \*太郎でこそこの問題を解いた。
- f. \*太郎でばかりこの問題を解いた。

<sup>2</sup> このような観点からの生成文法の枠組みにおける研究に Koizumi(1993)、佐藤(1997, 1998)などが挙げられる。

<sup>3</sup> この節の議論は沼田善子氏の指摘によるところが大きい。とりたて詞全体の体系から見た本節で取り扱う現象の分析・位置付けに関しては沼田(印刷中)を参照されたい

- g. \*太郎でだけこの問題を解いた。  
 (cf. 太郎だけでこの問題を解いた。)  
 h. \*太郎でしかこの問題を解かなかった。

また、(14d)は条件的な文脈に置けば次のように許容度が上がる。これはすなわち語形自体が許されないわけではないということであろう。

(15) 太郎ではこの問題を解くことができない。

これらの例に対しても、「デモ」と同じように、日本語では主語がデで現れることができるのでやはり「デ+X」であるという議論の可能性はある。しかし、これは成り立たないと考えられる。まず、そもそも(14a~c)、(15)からとりたて詞を除くとかなり許容度が落ちる。

- (16) a. \*太郎でこの問題を解いた (ことは...)  
 b. \*太郎でこの問題を解くことができなかった (ことは...)

(16a, b)はたとえコト節に埋め込んだとしてもほとんど非文法的である。さらに次に示すように、テへの後接という決定的な問題がある。

- (17) a. その大学へは、大通りを通ってでも行ける。  
 b. その大学へは、大通りを通ってでさえ行ける。  
 c. その大学へは、大通りを通ってですら行ける。  
 d. その大学へは、大通りを通ってでは行けない。

このように、「デ+X」型のとりにたて詞がそもそもテ自体に後接することができるのである。これでは、「デ+X」のデを接続/アスペクトマーカーのテであると言うことにはかなり無理がある。そうすると、これらの「デ+X」型とりたて詞は一語としての性質を持っていると考えた方が良く、ということになるのであろうか。

しかし、2.2.でも少し触れたように、テが動詞句などを何らかの形でまとめ

るという機能を持っているとすれば、このデはコンピュータとして分析される可能性がある。問題は、その“何らかの形”というのがどういう形なのかという点であるが、「名詞句、あるいは後置詞句として」と考えるのが妥当であろう。日本語の接続マーカー (C に当たる要素) が名詞的な性質をもつという点については Fukui(1986)に、日本語のテが後置詞句としての資格を持つという点については久保(1994)にすでに示唆があるところである。

しかし、この「デ」をコンピュータであると考える前に、検討しなければならない問題がある。それは、日本語にはいわゆる「述語代用のダ (奥津(1978))」が存在するという点である。

その問題を検討するためにも、さらにこの「デ+X」型のとりにたて詞についてももう少し観察してみよう。次のように、(17a~d)は全てデを省いた形で言い表すこともできる。

- (18) a. その大学へは、大通りを通っても行ける。  
 b. その大学へは、大通りを通ってさえ行ける。  
 c. その大学へは、大通りを通ってすら行ける。  
 d. その大学へは、大通りを通っては行けない。

しかも、ほとんど意味も変わっていないように感じられる。(17a~d)と(18a~d)を比べてまず感じるのは、(17a~d)の方が、テ節に関して意味的、音声的に強調のニュアンスがより強く感じられるということである。

この対比は、「デ+X」のデが述語代用ではないと考える強い証拠となる。なぜならば、(17a~d)と(18a~d)では、上に述べたような差はあるものの、デの有無によって文のいわゆる知的意味関係が変化しているということはないからである。述語代用のダというのは、その名の通り、意味的には動詞や形容詞などの述語の代わりとして機能する。もし(17a~d)のデが述語代用であるとすると、それは何らかの述語としての意味を節に付加するはずであり、現象と合わないことになってしまう。

さらに、この「デ+X」型のとりにたて詞は、述語代用のデと共起する場合もあると考えられる (下線部は述語代用)。

- (19) a. 太郎は花子と論文を書く。僕は次郎とだ。  
 b. 三郎とででも良い論文は書けるだろう。  
 (20) 太郎とででは、良い論文は書けないだろう。

(19b),(20)の一つ目のデは述語「論文を書く」を代用している。そうすると、このデモのデが代用する他の述語は存在しない。また、述語代用を二回繰り返していると考えられることにも合理的な理由を考えることはできない。

従って、ここまで見た現象からここで取り扱っている「デ+X」中のデはテ形の要素でもなく、述語代用でも無いと考えた方が良いでしょう。では、このデは例えば単に何らかの強調のために付加しているだけの要素なのだろうか。

しかし、この両者にはさらに文法的な、はっきりとした差が見られるのである。それは、次のように、「デ+X」とデを省いた形が交換可能でない場合があるということによって示される。

- (21) a. たとえ怪我をしても後悔はしない。  
 b. \*たとえ怪我をしてもで後悔はしない。  
 (22) a. たとえ無理やり出場しても勝ちたい。  
 b. たとえ無理やり出場してもで勝ちたい。

(21)の例では、「デ+X」型の方が許容されないし、(22)の例では二つの文を同じ意味として解釈することは難しい。

どのような要因がこれらの差を生み出すのかという点についてはさらに多くの環境について観察しなければならないであろうが、一つ言えるのは、「デ+X」型のとりたて詞は従属節の動作主が主節と一致する環境で最も許容されやすいということである。(21b)では従属節の述語が「怪我をする」という非動作主をとるものであるために許容されない。(22b)では、従属節の述語が「出場する」であるのに加えて、主節が「勝ちたい」というように意志性を強く表す表現であるために自然になっていると考えられる。

これはさらに次のような対比によって裏付けられる。

- (23) a. 太郎は花子が無理やり出場しても勝ちたい。  
 b. \*太郎は花子が無理やり出場してもで勝ちたい。

このように(23b)で従属節と主節の主語を異なった動作主にするだけで、文は許容されなくなってしまう。これは、「デ+X」型のとりたて詞が、主語が現れない比較的小きな節（南(1974)で言えばA段階）にしか後接しないということである。

もし「デ+X」のデが単なる強調のために現れる成分であれば、テ節+Xが可能な文脈では全てテ+デ+Xが可能になって良いはずであるが、実際には上で示したような統語論的な条件によってその生起の可能性が決まっているのである。

ここまで議論してきた事実を総合すると、この場合のデというのはやはりコンピュータのような要素であると考えられる可能性しか残されていないように思われる。また、コンピュータは一般的に、(知的)意味は希薄で、しかし非常に統語論的に重要な機能を持つという点も、上での議論と相性が良いと考えられる。

そう結論すると、やはりそれに前接できるテ節というのは一種のかたまりとしての性質を持つと言わなければならない。この点についてはもう少し次節で詳しく論じる。

## 5. まとめ

最後に、ここまで提出してきたいくつかの議論がお互いに、あるいは先行研究とどのように関連しているのか、という点についてまとめておく。

### 5.1. 現象同士の関わり: とりたて詞の統語論的位置付け

主に4.で述べた、「テ節は一種のかたまりとしてとりたて詞に付加されている」という見方は、1.と2.で取り上げた、「テの前後のとりたて詞の分布」に関して一つの予測を与えることができる。

それは、動詞連用形（テの前）に生起するとりたて詞は、何らかの形で述語（head）の階層上に現れ、分布しているのに対して、テの後に現れているとりたて詞は、名詞に付加する時のように、テ節全体に付加しているのでは

ないか、というものである。

このように両者に異なった位置付けを与えることによって、テの前後、すなわち表面上非常に近い位置にとりたて詞が現れるという事実が捉えられると本稿では考える。

今回は詳しく取り扱わなかった動詞連用形に付くとりたて詞がどのような統語論的性質を持つのか、という点に関しては大きな議論があるところであるが (Aoyagi(1998), Fukui and Sakai(2003), 茂木(2003), Yanagida(2005), 田川(2005)など参照)、このようにテを絡めて議論することによって、新たな進展が得られるかもしれない。

## 5.2. 先行研究との関わり

本稿は一貫してとりたて詞に関する統語論的観点からの議論を提出してきたが、とりたて詞に関する統語理論からの研究は佐野真樹氏による一連の体系的な研究や、Aoyagi(1998), 茂木(2002, 2003), Yanagida(2005)など豊富な蓄積がある。

しかし、これらの研究はとりたて詞の統語論的位置付けについて重要ではあるが、その議論は特にとりたて詞のスコープといった、他の要素との意味論的關係性に関する現象からなされたものがほとんどである。

そこで、本稿のような(形態)統語論的な観点に絞った研究も必要であると考えられる。実際、本稿で取り上げたような現象は、とりたて詞に関する理論的な研究では取り上げられることはほとんどなかった。今後は、上で挙げたような先行研究との関係について考えなければならない。

また、理論的研究に限らずとも、本稿で提示した現象はほとんどがこれまでとままと記述がなされてこなかったものであり、一まとまりの現象を提示したという点でもその意義はあるであろう。それら先行研究で主に扱われてきた現象との関係性についても今後の課題としたい。

## 【参考文献】

Aoyagi, Hiroshi(1998) *On the Nature of Particles in Japanese and Its Theoretical Implications*. Ph.D.Dissertation, University of Southern California.

Fukui, Naoki(1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*. Ph.D. dissertation, MIT.

Fukui, Naoki and Hiromu Sakai(2003) "The Visibility Guideline for Functional Categories: Verb Raising in Japanese and Related Issues." *Lingua* 113.

金水敏(1999)「近代語の状態化形式の構造」『近代語研究 第十集』 pp. 391-418

Koizumi, Masatoshi(1993) "Modal Phrases and Adjuncts," *Japanese/Korean Linguistics* 2. pp.410-428

久保美織(1994)「日本語の動作・状態述語について」『国語学』 178 pp.90-100

南不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館書店

茂木俊信(2002)「「ばかり」文の解釈をめぐって」『日本語文法』 2:1 pp.171-189

茂木俊信(2003)『とりたて詞文の解釈と構造』筑波大学博士(言語学)学位請求論文

沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

沼田善子(2000)「とりたて」『時・否定と取り立て』 pp.154-227

沼田善子(印刷中)「「でも」か「で」と「も」か—「だ+とりたて詞」の諸相—

奥津敬一郎(1978)『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー—』くろしお出版

佐藤直人(1997)「日本語のナガラ節の意味と位置の相関」『言語科学論集』 1, pp.63-74 東北大学文学部

佐藤直人(1998)「日本語のナガラ節の内部構造について」『文化』 61:3, pp.55-65 東北大学文学部

田川拓海(2005)「現代日本語における動詞連用形の形態統語論的考察—拡散形態論の観点から—」『第130回日本言語学会予稿集』 pp. 110-115

内丸裕佳子(2006)「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』 2:1 pp.1-14

Yanagida, Yuko(2005) *The Syntax of FOCUS and WH-Question in Japanese: A Cross Linguistic Perspective*. HITUZI SYOBO Publishing.

## On *Toritata* focalizers co-occurring with *te*-form

TAGAWA, Takumi

This paper provides some descriptive arguments about *Toritata* focalizers (e.g. *mo*, *sae*, *dake*, *bakari*...) which co-occur with so-called “*te*”-form from the syntactic point of view.

The arguments are as follows.

1) *Toritata* focalizers are divided into two groups with respect to whether they can precede or follow *te* (in this paper, “preceding *te*” means “following verbal form so-called Ren’yoo-kei”). On the one hand, *mo*, *sae*, *sura*, *ha* and *sika* consist of one group. They can precede and follow *te*. On the other hand, *dake* and *bakari* make up one group. Both particles can not precede *te*.

2) Adding to the argument 1), *dake* and *bakari* differ in following *te*. *Dake* can not follow *te* while *bakari* can. Although they have a common meaning “restrictive”, they differ in syntactic behavior. The fact gives one empirical evidence to necessity of pure syntactic approach to *Toritata* focalizers.

3) Some *Toritata* focalizers which are formed by *de* (e.g. *demo*, *desae*, *desura*, *dewa*) do exist. I show that this “*de*” must be considered as a copular and other three possibilities may be excluded from empirical evidences; they are a) *de*-X is one word as a whole, b) this *de* is conjunctive marker, c) this *de* substitutes other predicate.

In the argument, I suggest that *te*-form behave as a NP or PP rather than VP. This may enable us to explain a distributional problem of *Toritata* focalizers concerning *te*-form.